

お わ り に

「・・・～前略～・・・。また、学習上の特性としては、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に・・・～後略～・・・」

御存知のように、私たち知的障害のある子どもの教育に携わっている教員が、必ず目にする「盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説―各教科、道徳及び特別活動編―」の一節である。

従来、これらを補うための手段の一つとして「領域・教科を合わせた指導」等、様々な指導の形態を通して私たちは「授業で勝負」してきた。そして、4年前の公開研究会では子ども自身はもとより、保護者や教師の願い等をきっちりと受け止め、教育的ニーズを的確に押さえた「個別の指導計画」に基づく授業づくりの在り方を、その成果と共に提案した。

それでもやはり、生活への応用が十分でなく子どもたちには苦戦している状況がある。

そこで、2年前の公開研究会では「子どもの生活をつなぐ支援体制づくり」に取り組み、一人一人の子どもの「応用」のための協力者のネットワークを作ることで、「個別の教育支援計画」が実効性のあるものになることを提案した。

そして、ようやくたどり着いたのが今回の研究である。今回のテーマ「自分のよさやもてる力を発揮する子どもを目指した授業づくり」は、まさに特別支援教育の時代となった現在の授業づくりの在り方を問うものである。同じ「授業づくり」でも4年前にはなかった「支援体制」がそこにある。この2年間、本校の教師たちは、ただひたすらにこの何のてらいもない当たり前のテーマに向かって、様々な支援者との連携の下に、地道な踏ん張りで協働作業を繰り返してきた。

前回の研究もそうであったが、ありがたいことに、今回も鹿児島大学の教員や学生、福祉・労働機関や医療機関の方々、ボランティアの方々、そして子どもの生活圏にあってかかわってくださる様々な方々の献身的な協力を得た。

今回の「授業づくり」の研究をもって、この4年間の「支援体制」に基づく実践研究は一応の区切りをつけるが、実践に基づく検証という点ではまだまだ十分でなく、多くの課題を抱えている。今後の本校の実践研究の充実のために、多くの方々から忌憚のない御批判、御教示等賜りたい。

また、今回は、障害のある子どもたち若しくは大人の方々とのかかわりの中で、彼らの人生をより豊かなものにするために様々な分野のそれぞれの立場で御活躍いただいているの方々から、ポスター発表のかたちではあるが、きわめて良質の実践例を御提供いただき、わたしたちの公開研究会に彩りを添えていただいた。心から感謝申し上げたい。

最後になりましたが、今回の研究に際し御後援をいただいた鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会、また、研究推進のために懇切に御指導くださった釘田雅司先生（鹿児島県教育庁義務教育課指導主事）、岩本伸一先生（鹿児島県総合教育センター特別支援教育研修課係長）、五反田勝先生（鹿児島県総合教育センター研究主事）、清原浩先生（鹿児島大学教育学部障害児教育学科教授）、内田芳夫先生（鹿児島大学教育学部障害児教育学科教授）、雲井未歎先生（鹿児島大学教育学部障害児教育学科助教授）に深く感謝の意を表します。

平成19年2月2日

副校長 宮内英光

研究同人

校長 畠澤 郎 副校長 宮内 英光 教頭 中島 芳博

【小学部】

中 村 周一郎
東 みゆき
☆高尾 政代
山下 英一
井上 隆司
☆佐藤 美由紀
遠矢 博貴
福元 康弘

【中学部】

奥 政治
加治木 守
☆上温湯 晋
亀田 純
本村 祐貴子
☆松元 多津子
中村 麻子
濱崎 真梨子

【高等部】

小山 浩平
藤上 実紀
☆木戸 ルリ子
岡元 明広
鎌田 志穂
☆萩之内 靖
☆末廣 剛志
笹河 博幸
川添 さやか

【養護教諭】

蕨迫 美由紀

☆：研究部員

【共同研究者】

鹿児島大学教育学部障害児教育学科
教授 清原 浩
教授 内田 芳夫
助教授 雲井 未歆

【育児休業中】

畑山 直子

【転出】

松永 郁男 河野 通堯 西田 恵子
大庭 朋子

研究紀要 第16集

発行 平成19年2月
発行所 鹿児島大学教育学部附属養護学校
〒890-0005 鹿児島市下伊敷一丁目10番1号
Tel. 099-224-6257
印刷所 有限会社 アート印刷
〒892-0861 鹿児島市東坂元二丁目29-1
Tel. 099-247-1605
